

2024 年度 全国学生調査 基本集計 三大学比較

北海道国立大学機構・教育イノベーションセンター
2025/03/10

1. はじめに

文部科学省は「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」において、国は教育成果や教学に係る取組状況等の大学教育の質に関する情報を全国的な学生調査や大学調査を通じて整理し、比較可能な形で公表すべきであると提言されたことを受けて、全国の大学を対象とした試行的な学生調査を 2019 年度から実施しており、これらの結果を踏まえて 2025 年度から本格実施されることが決まっている。

本調査への参加は任意であるが、北海道国立大学機構の三大学（小樽商科大学・帯広畜産大学・北見工業大学）はいずれも 2024 年度の試行調査に参加している。本調査では参加大学に対して「学内外のステークホルダーや社会に対する積極的発信」「IR・FD・SD 活動、自己点検・評価への活用」「共通項目を生かした他大学等との比較や情報共有」などを通して、学生の意見を踏まえた教育改善を促進することが求められている¹⁾。

これらを受けて、北海道国立大学機構における三大学の横断的な教育開発や連携教育、FD や IR を担う教育イノベーションセンターでは、所属するそれぞれの大学の教育の特徴や課題等を相対的に把握するために、共通の質問項目で実施されている全国学生調査の大学間比較分析を行った。個々の調査結果はそれぞれの大学において必要に応じて活用されているが、大学間で相互に比較することで自大学のデータだけでは把握できない特徴や課題を知ることができ、各大学の分析結果のより有効な活用が期待される。特に、北海道国立大学機構の三大学はそれぞれ単科大学であることから、大学内での比較分析に限界があるため商学・農学・工学の分野が異なる大学間で比較分析する意義は大きい。

2. 調査概要

2.1. 質問項目

質問内容は全国の大学で共通であり、1. 授業について、2. インターンシップや海外留学等の経験および有用性、3. 大学教育を通して身に付いた知識や能力、4. 学習達成や成長実感、大学の教育改善や教職員の対応、5. 学習時間や課外活動の時間をたずねている。詳細は末尾に添付した学生向けの案内を参照されたい。

2.2. 実施方法と期間

調査の実施方法は、文部科学省の Web アンケートに学生が直接回答する方法と大学が独自に調査を実施する方法を選択できるが、三大学ともに前者の方法で実施した。実施期間はそれぞれの大学で任意に設定することができ、小樽商科大学は 2024 年 11 月 7 日から 12 月 6 日、帯広畜産大学は 2024 年 11 月 1 日から 11 月 30 日、北見工業大学は 2025 年 1 月 14 日から 2 月 12 日に実施した。ただし、北見工業大学は回答期間を 3 月 7 日まで延長した。

2.3. 回答状況

各大学の回答状況を表 2-1 に整理した。調査対象は各大学の 2 年次生および最終学年で、最終学年には留年した学生も含まれる。また、帯広畜産大学の共同獣医学課程は 6 年制であるため、最終学年は 6 年生となる。

表 2-1: 回答状況

大学	2 年生			4 年生			6 年生			合計		
	回答者数	回答率	N	回答者数	回答率	N	回答者数	回答率	N	回答者数	回答率	N
小樽商科大学	250	43.8%	571	195	33.3%	586				445	38.5%	1157
帯広畜産大学	67	25.8%	260	44	19.8%	222	9	23.7%	38	120	23.1%	520
北見工業大学	46	11.2%	410	59	12.2%	485				105	11.7%	895
全体	363	29.3%	1241	298	23.0%	1293	9	23.7%	38	670	26.0%	2572

1) 令和 6 年度「全国学生調査（第 4 回試行実施）」実施概要：https://www.mext.go.jp/content/20240903-mxt_koutou02-000037880_6.pdf

2.4. 集計方法

大学ごとの調査結果についてはそれぞれの大学において目的に応じて集計、分析されているため、ここでは大学間の違いに注目して各大学の学年を単位として比較分析を行う。ただし、帯広畜産大学の共同獣医学課程の最終学年は 6 年生であるが、回答者数が少なくまとまった分析が難しいため、同大学の畜産科学課程の 4 年生と統合し最終学年としてまとめて集計した。

集計はそれぞれの項目について、回答の割合を 100%積み上げ帯グラフで示し、各選択肢に対してポジティブなものから順に 4 点から 1 点を与えて平均を求め、帯グラフ上の点で示した。また、帯グラフは選択肢の中央が 0 になるように左右にずらしている。帯グラフおよび点の位置が右にあるほどポジティブな回答が多いことを示し、具体的な回答の内訳は帯グラフの幅と数値で示した回答割合と回答者数から読み取れる。

3. 集計結果

3.1. 授業の方法や指導について

授業の方法や指導について「大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか」として 6 つの項目を提示し、それぞれについて「1. よくあった」「2. ある程度あった」「3. あまりなかった」「4. なかった」の 4 段階で回答を求めている。図 3-1 に集計結果を示す。

「理解がしやすいように教え方が工夫されていた」では全体として「あった」という回答が多く、大学や学年によって大きな差はみられないが、帯広畜産大学がやや多い傾向があるようである。いずれの大学も「教え方」の面では学生から一定の評価がなされているようである。「予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される」ではいずれの大学も総じて「あった」との回答が多い。学年ごとにみると、小樽商科大学や帯広畜産大学では最終学年よりも 2 年生の方が多く、北見工業大学では最終学年の方が多くなっている。

「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」では、いずれの大学も全体的に「なかった」側の回答が目立つ。大学間の差は大きくはないが、北見工業大学、帯広畜産大学、小樽商科大学の順で「あった」という回答が多く、またいずれの大学でも最終学年の方がわずかに多い傾向がある。学生の提出物へのフィードバックは 3 大学で共通する課題といえるかもしれない。

「グループワークやディスカッションの機会がある」では大学間で差がみられ、教育方法や教育内容の違いがうかがえる。帯広畜産大学で「あった」側の回答割合が少なくなっているが、これは必ずしも当該大学でグループワークやグループディスカッションが行われていないということではないだろう。グループによる学習は行われているが、それが「グループワーク」という概念として認識されていないのではないだろうか。小樽商科大学では学年によってほとんど差はなく、全体として「あった」と回答しているが、北見工業大学では最終学年のほうがその割合が多い。北見工業大学では卒業研究等によってグループワークが増加することが要因だと考えられる。

「質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある」では、全体として帯広畜産大学でポジティブな回答が多く、特に最終学年で言及が多い。大学の性質上、研究室での活動を通して教員等とのコミュニケーションが増加することが関係しているのかもしれない。この傾向は北見工業大学でもみられるが、小樽商科大学では学年による差は小さく、最終学年の方が若干少ない。いわゆる「理系」「文系」の教育システムやスタイルの違いが関係していると推察される。

「ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある」では、北見工業大学がいずれの学年でも「あった」と回答する割合が多い。他方で小樽商科大学では「なかった」側の回答が目立つ。小樽商科大学では分野的にそもそもティーチングアシスタントが配置されている科目自体がそれほど多くはないことが原因だろう。帯広畜産大学では 2 年生時に「あった」との回答はさほど多くはないが、最終学年では割合が増加している。分野によって、教育におけるティーチングアシスタントの活用方法に違いがあることがうかがえる。

全体としては、各大学ともにそれぞれ理解しやすいように教え方の工夫がなされていることが学生に評価されているといえる一方で、課題提出物へのフィードバックはやや不十分だと感じられているようである。グループワークやティーチングアシスタントなどは、分野の違いによる教育方法の差が反映したものと考えられる。大学間の回答の相対的な違いを切り口に、各大学でそれぞれの教育目的や意図に対応したものになっているかを点検すればよいだろう。

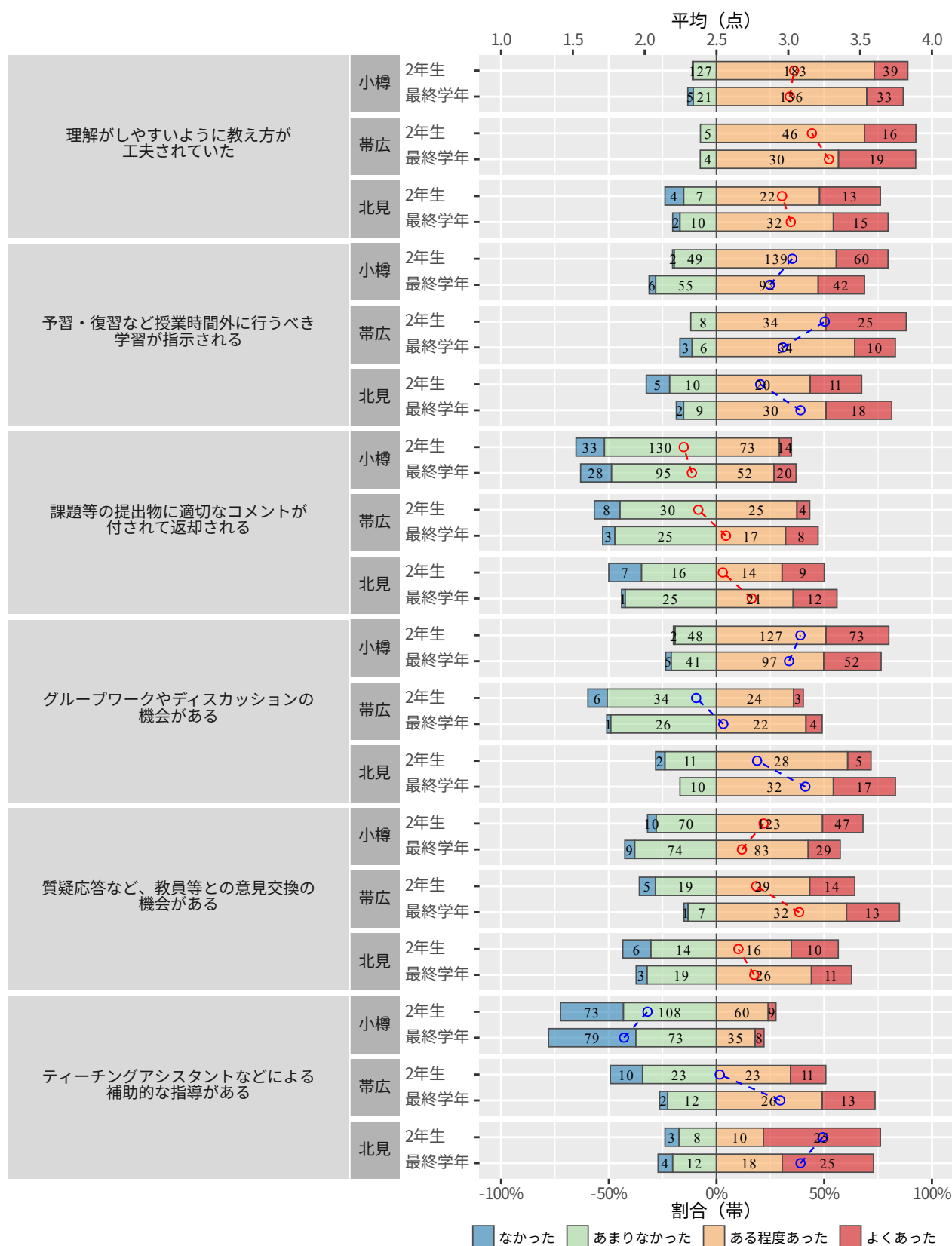


図 3-1: 授業の方法や指導について

3.2. 在学中の経験の有用性

在学中の経験の有用性について「大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか」として、「インターンシップ（5 日間以上）」「海外留学・海外研修（短期も含む）」「主に英語で行われる授業の履修（語学科目を除く）」の 3 項目を挙げ、それぞれについて「1. 有用だった」「2. ある程度有用だった」「3. あまり有用ではなかった」「4. 有用ではなかった」の 4 段階で回答を求めている。なお、これらの経験が無い場合は「経験していない」を選択するように指示されている。

3.2.1. 経験の有無

まず、図 3-2 からこれらの経験の有無を確認する。インターンシップはいずれの大学でも経験している学生の割合はそれほど多くはない。また海外留学や海外研修の経験者は 1 割ほどとなっている。英語で行われる授業はいずれの大学でも半数以上の学生が経験しているようである。

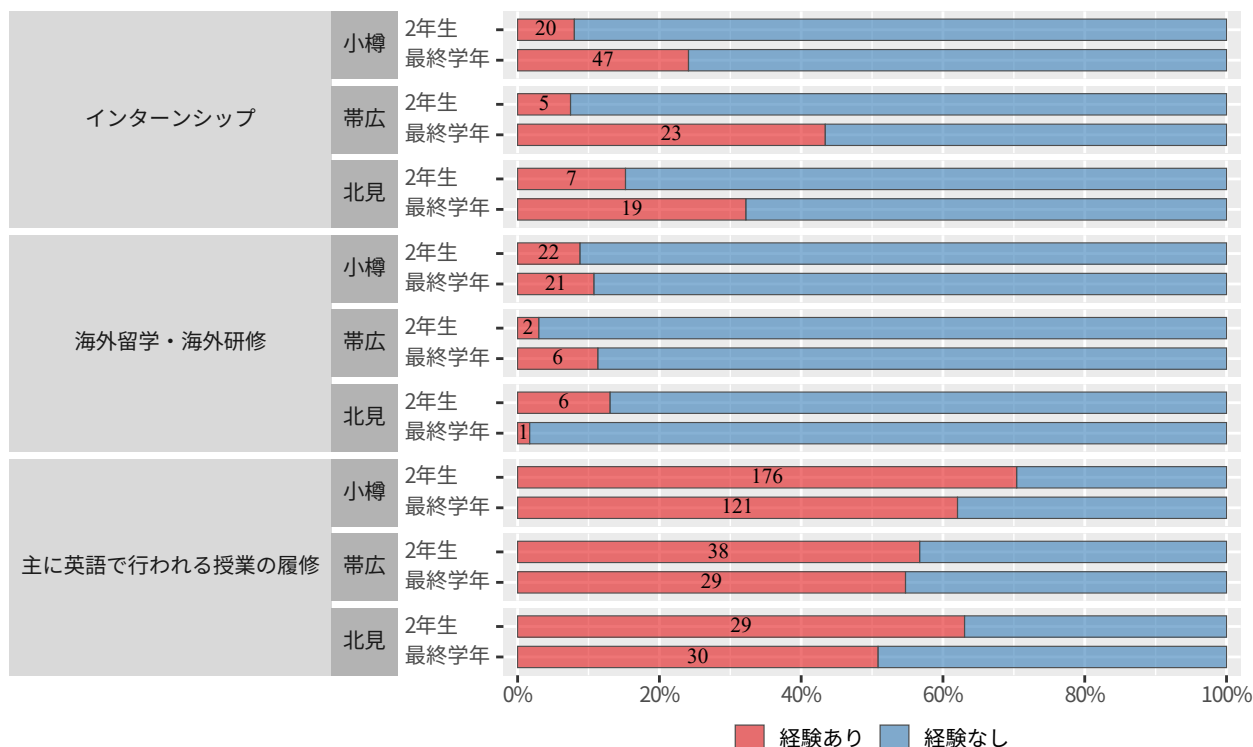


図 3-2: 在学中の各種経験の有無

経験者におけるこれらの経験の有用性の認識を図 3-3、図 3-4 に集計した。「インターンシップ」「海外留学・海外研修」は経験した学生の数が少ないため大学間で比較することが難しいものの、全体的な回答の傾向としては「有用だった」の割合が多い。比較的多くの学生が経験している「主に英語で行われる授業」は、大学や学年によって大きな差はなく、総じていえば「有用」だと感じられているようであるが、「有用ではない」側の回答も一定数みられ、その傾向は北見工業大学で若干多い。近年、英語で行われる授業は増加傾向にあり多くの学生が経験するようになってきているが、その効果にも留意しなければならないだろう。

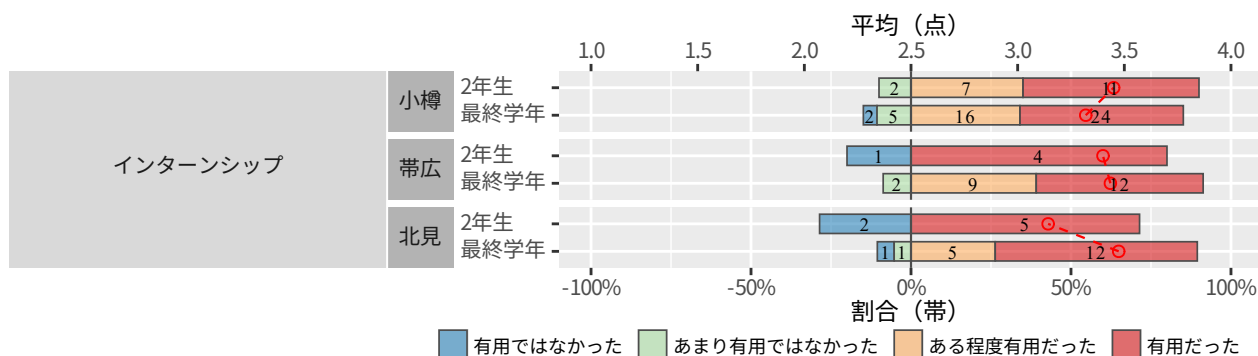


図 3-3: 経験の有用性

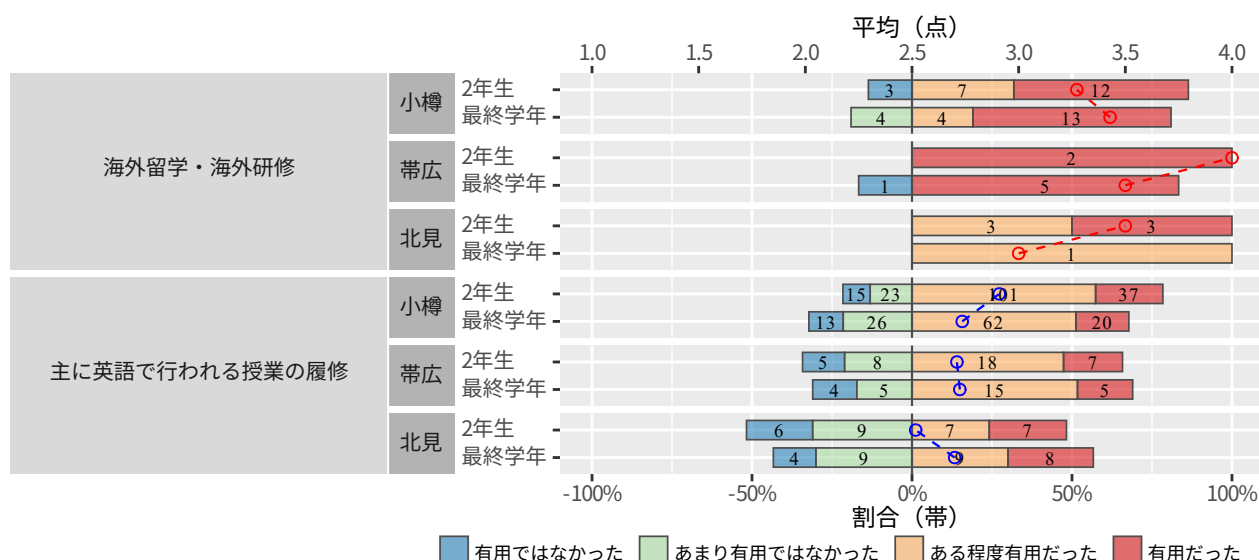


図 3-4: 経験の有用性

3.3. 大学教育で身に付いた知識や能力

大学で身に付いた知識や能力について「大学教育を通じて、次のような知識や能力などが身に付いたと思いますか」として 11 項目を挙げ、「1. 身に付いた」「2. ある程度身に付いた」「3. あまり身に付いていない」「4. 身に付いていない」の 4 段階で回答を求めている。集計結果を図 3-5、図 3-6 に示す。

「専門分野に関する知識・理解」「将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観」ではいずれの大学でも全体的に「身に付いた」側の回答割合が多く、なかでも帯広畜産大学の最終学年で多い。また、帯広畜産大学、北見工業大学では 2 年生よりも最終学年の方が身に付いたと回答する傾向があるのに対して、小樽商科大学では学年間で差がみられない。専門性や職業への接続という点では理系の方が意識しやすく、学年が上がるほど明確になるのかもしれない。

「文献・資料を収集・分析する力」も、どの大学でも総じて身に付いたと感じられており、2 年生よりも最終学年の方がその傾向が強い。文献・資料の収集や分析は高学年で取り組むことが多いことが要因だと考えられる。「論理的に文章を書く力」は、小樽商科大学で学年を問わず身に付いたと感じる割合が多い。帯広畜産大学では 2 年生ではあまり感じられないが、最終学年では割合が大きく増加する。「人に分かりやすく話す力」では、身に付いていないと感じる学生の割合がやや多く、帯広畜産大学の 2 年生では半数程度が身に付いていないと感じているようである。

「外国語を使う力」は、小樽商科大学で身に付いたと感じる割合が多く、帯広畜産大学、北見工業大学と続く。学年の違いをみると、小樽商科大学では 2 年生の方が身に付いたと感じる割合が多いのに対して、帯広畜産大学では最終学年の方が多くなっている。また北見工業大学は学年で大きな差はみられない。パネルデータではないため学年進行との関係は議論できないが、小樽商科大学で最終学年の方が身に付いたと回答する割合が少ない点は留意が必要かもしれない。

「数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能」は専門分野をよく反映しており、北見工業大学、帯広畜産大学、小樽商科大学の順に身に付いたと回答する学生の割合が多い。また、北見工業大学、帯広畜産大学では最終学年の方が、大きく身に付いたと回答する割合が多い。理系の学部・学科では卒業研究等で統計を用いることも多いことがその要因だろう。小樽商科大学ではこれらの知識が身に付いたと回答する学生が半数に満たず、数理・データサイエンス教育に課題があることが示唆される。

「問題を見つけて解決方法を考える力」「他者と協働する力」「幅広い知識、ものの見方」などの汎用的な能力については、全体として身に付いたと回答する学生の割合が多い。また学年による差はあまりないものの、最終学年の方が身に付いたと回答する傾向があるようである。「異なる文化に関する知識・理解」が身に付いたと回答する割合は小樽商科大学が相対的に多く、続いて帯広畜産大学、北見工業大学となり、大学間でやや差があるようである。また、「外国語を使う力」と同様に、小樽商科大学では最終学年の方が低く、帯広畜産大学は逆に最終学年の方が高い。

以上から、全体としてはいずれの大学でも専門分野の知識・理解や汎用的能力は一定の修得がみられるようであるが、外国語運用能力や数理・データサイエンスの知識・スキルは大学間で差があり、十分に習得されていない部分も見受けられる。それぞれの大学の課題として受け止めたうえで、対応や改善を検討する必要があるだろう。

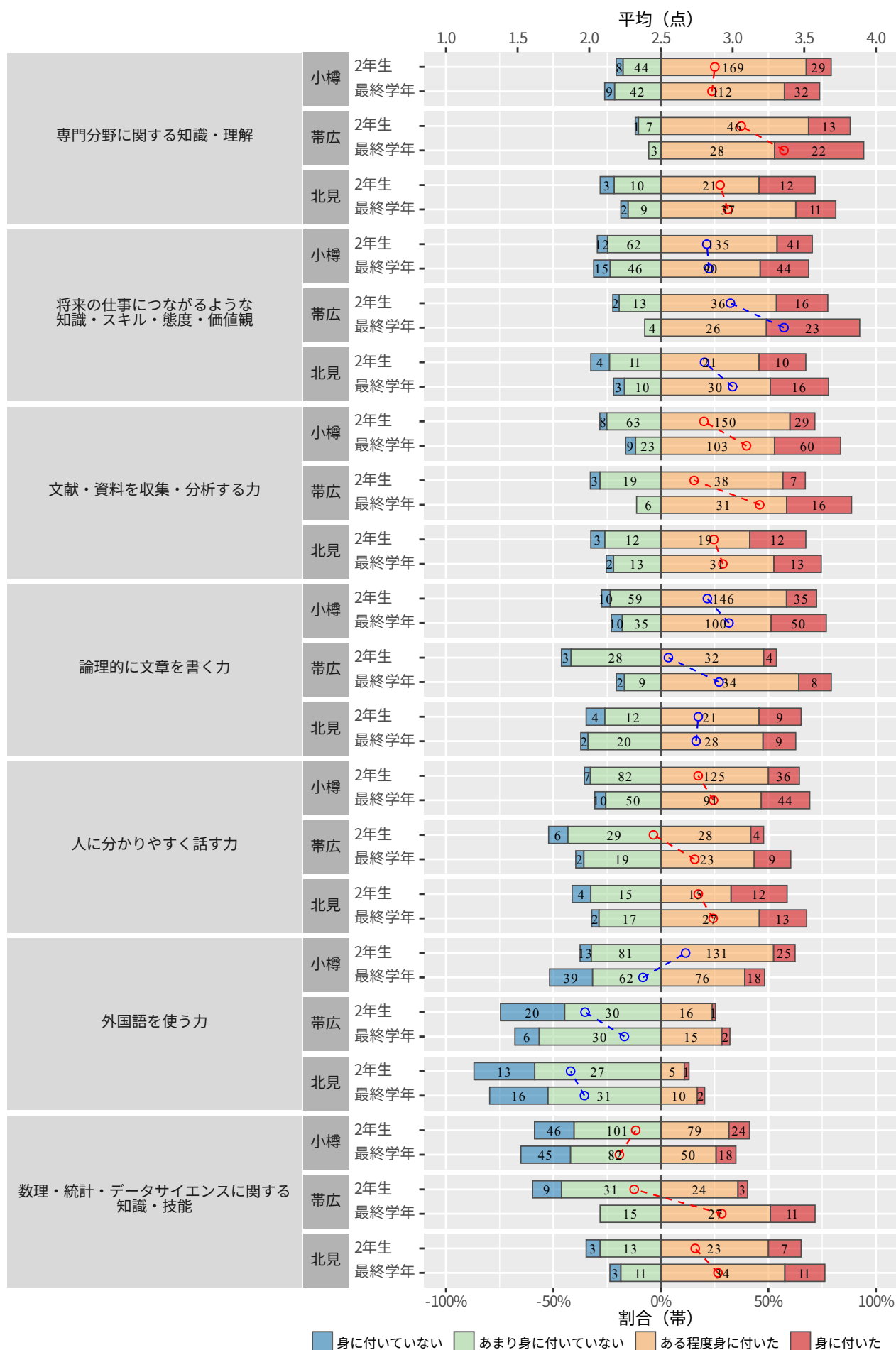


図 3-5: 大学教育で身に付いた知識や能力

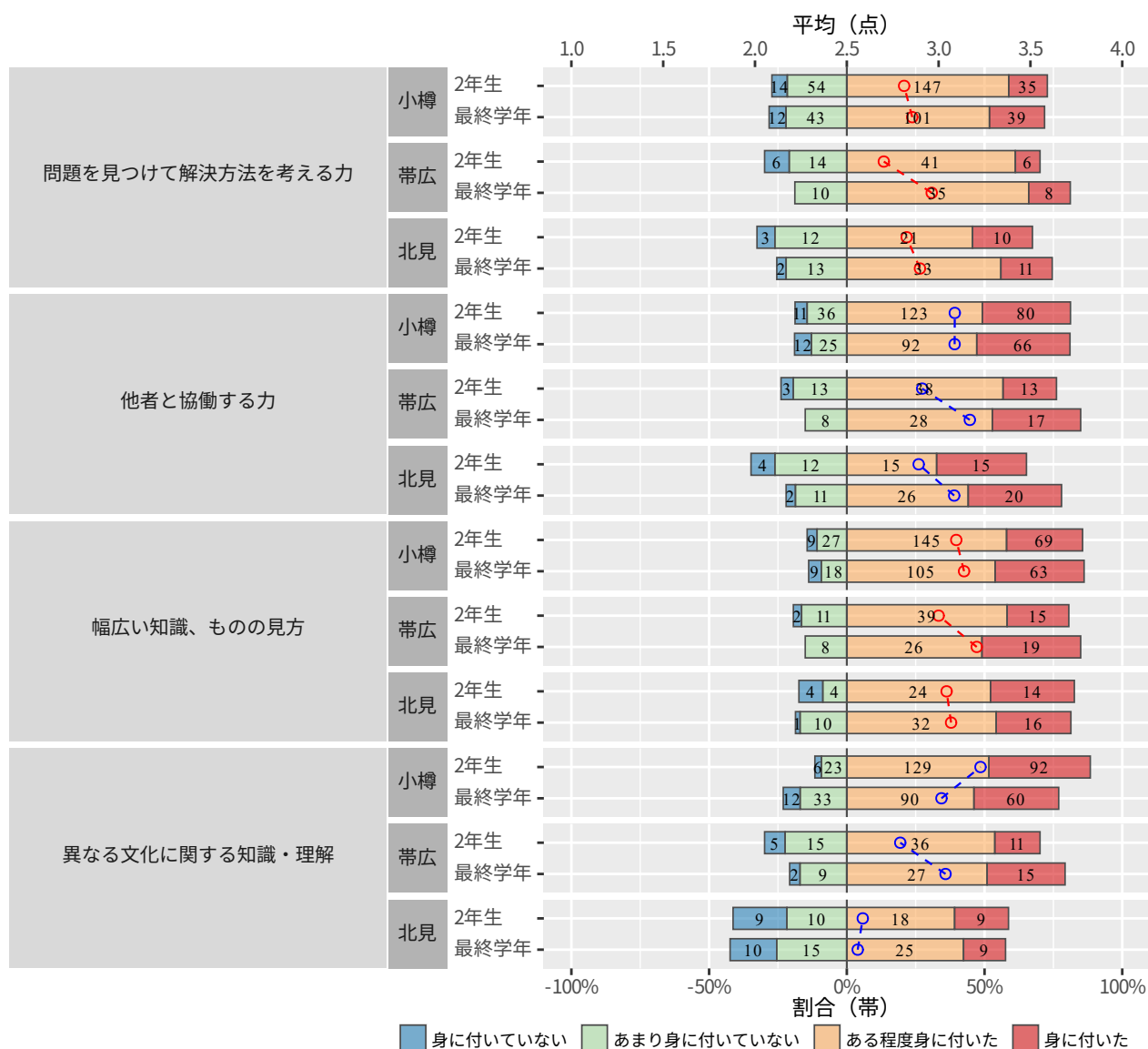


図 3-6: 大学教育で身に付いた知識や能力

3.4. 学習達成や成長実感・教育改善や教職員の対応

学習に対する意識や成長実感、大学の教育改善や教職員の対応などについて「これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか」として、「1. そう思う」「2. ある程度そう思う」「3. あまりそうは思わない」「4. そうは思わない」の4段階で回答を求めている。集計結果を図 3-7 に示す。

「卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している」では、全体的には「そう思う」側の回答が多く、学修において大学で学ぶべきことが意識されていることがうかがえる。学年ごとにみると、小樽商科大学では2年生よりも最終学年の方が「そう思う」側の回答が少なく、帯広畜産大学では最終学年の方が多い。北見工業大学は学年による差はあまりない。

「授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」は、いずれの大学でもネガティブな回答がやや目立つ。帯広畜産大学では最終学年で「そう思う」側の回答が多くなっているが、小樽商科大学、北見工業大学はむしろ少なくなっている。大学では学生に対して各種アンケートを実施しているが、これらが大学教育の改善に結びついているという実感はあまりないようである。アンケートで集められた意見のすべてに逐一对応することは非現実的であるが、実施したアンケートの結果やそれに対する大学側からのコメントや説明を学生にフィードバックすることは必要だろう。「教職員が熱心に教育に取り組んでいる」では、帯広畜産大学でポジティブな回答が目立つ。小樽商科大学と北見工業大学もネガティブな回答が目立つほどでもないといえるが、やや留意が必要な点だろう。

「大学の学びによって成長を実感している」はいずれの大学でも「そう思う」側の回答が大半を占めており、一定の成長が感じられているようである。やや気になる点は、帯広畜産大学と北見工業大学では最終学年の方がポジティブな回答の割合が多いのに対して、小樽商科大学では若干ではあるが最終学年の方がネガティ

ブな回答傾向にある点である。小樽商科大学では他の項目でも同様の傾向がみられることから、継続的に観察するとともに他の調査等でも状況を把握することが必要かもしれない。

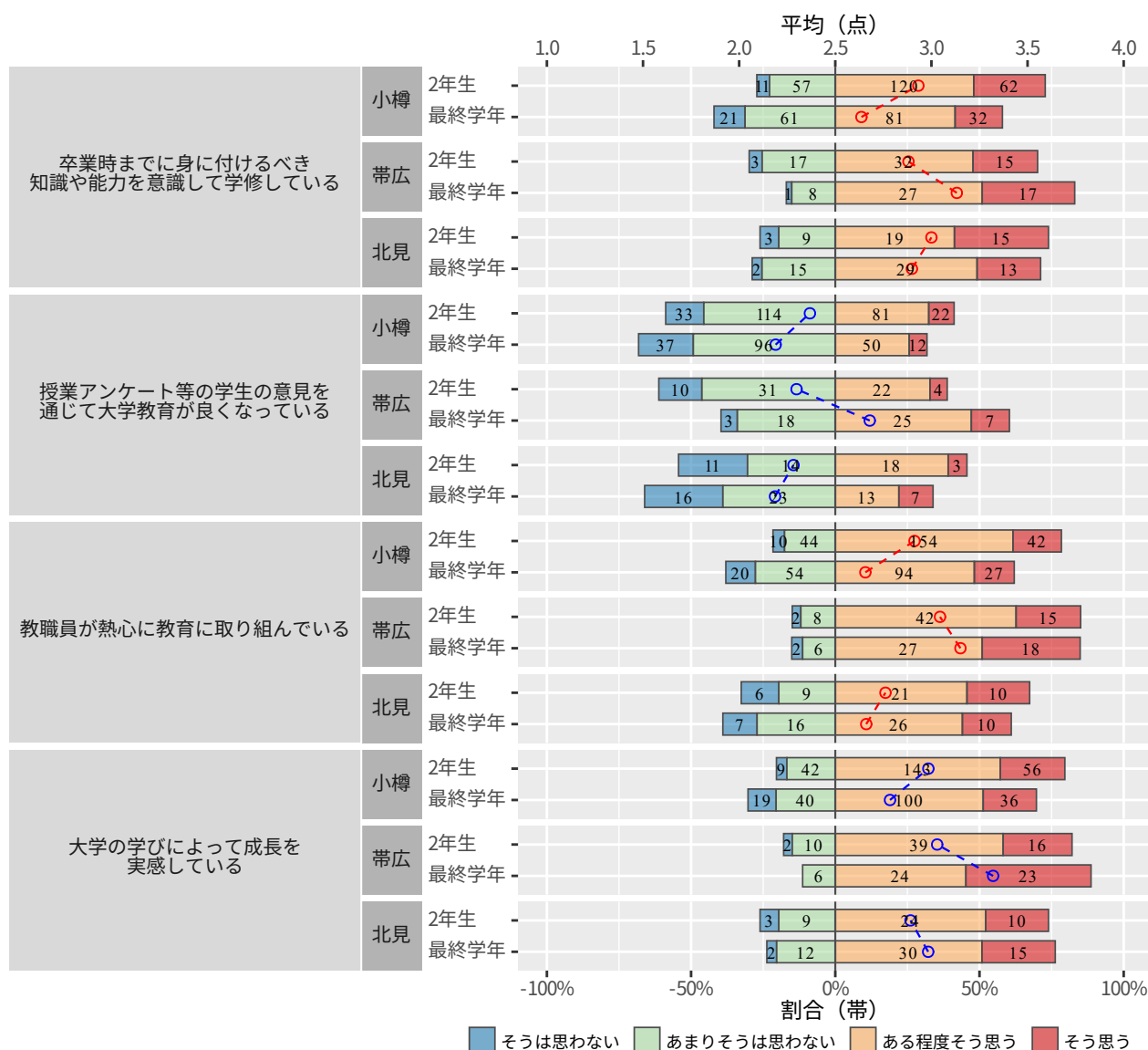


図 3-7: 学習達成や成長実感・教育改善や教職員の対応

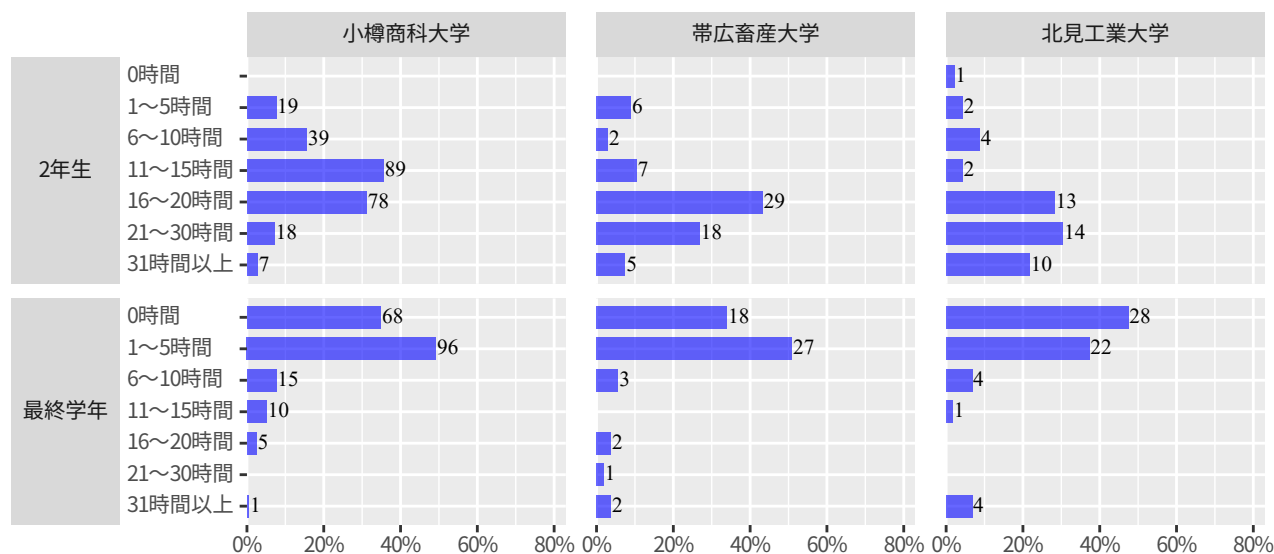
3.5. 学習時間や課外活動等の時間

今年度の後期の学習や課外活動、アルバイト等の時間について「今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか」として6項目を挙げ、それぞれについて「0時間」から「31時間以上」まで5時間区切りで回答を求めている。

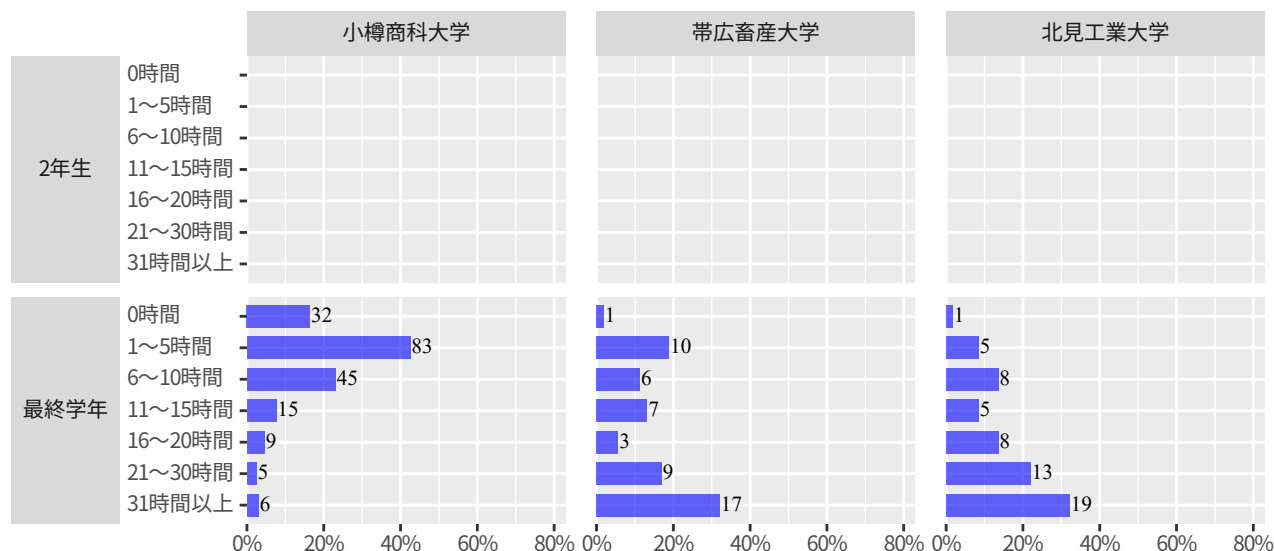
大学生活における各種活動への時間配分は、分野の違いを反映して小樽商科大学と北見工業大学、帯広畜産大学の2大学で傾向が異なるようである。「授業への出席（実験・実習、オンライン授業を含む）」は最終学年では大学間に差はみられないが、2年生では小樽商科大学の時間がやや短いようにみえる。また「卒業論文・卒業研究・卒業制作」は、いわゆる「理系」の帯広畜産大学や北見工業大学の方が明らかに割く時間が長いことがわかる。分野によって低学年時の科目履修の状況や卒業研究等のあり方の違いがみて取れる。

他方で、「予習・復習・課題など授業に関する学習」「授業と直接関係しない自主的な学習」「部活動／サークル活動」では目立った違いはないようである。「アルバイト／定職」については、いずれの学年でも小樽商科大学の時間がやや長いようにみえる。これは先に言及した授業履修や卒業研究の時間の裏返しであると考えられる。

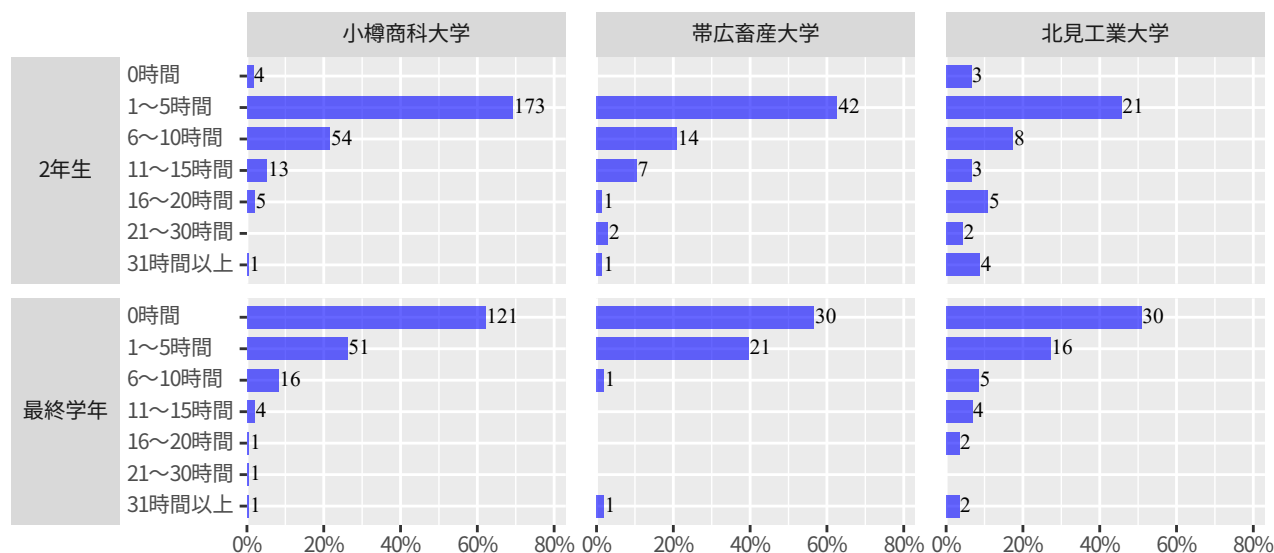
3.5.1. 授業への出席（実験・実習、オンライン授業を含む）



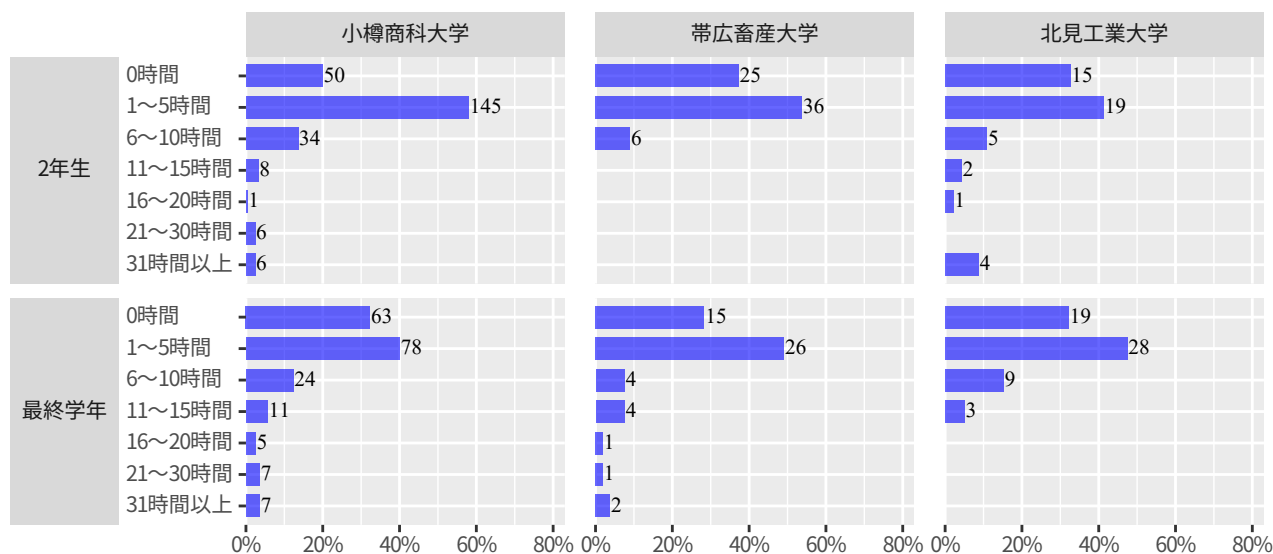
3.5.2. 卒業論文・卒業研究・卒業制作



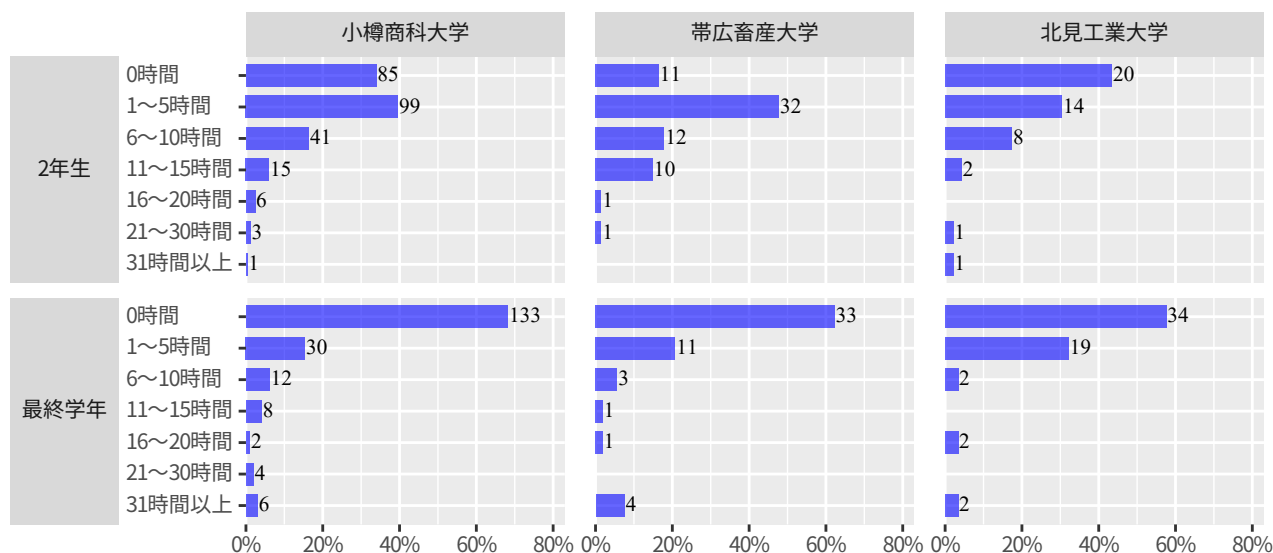
3.5.3. 予習・復習・課題など授業に関する学習



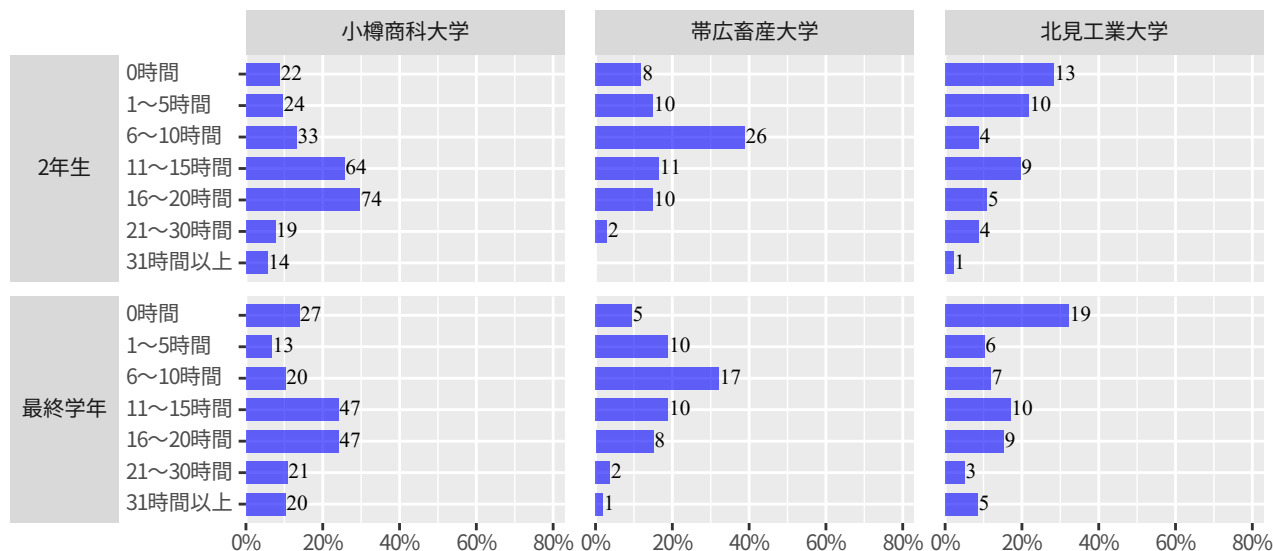
3.5.4. 授業と直接関係しない自主的な学習



3.5.5. 部活動／サークル活動



3.5.6. アルバイト／定職



質問項目

この用紙を見ながら回答すると効率的です！



基本情報

1. あなたが在籍する学部等（短期大学は学科等）を選択してください
2. あなたが在籍する学科等（短期大学は専攻等）を選択してください
3. あなたの学年を選択してください

大学での授業・経験・学習等について

問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか。

項目	よくあった	ある程度あった	あまりなかった	なかった
1-1. 理解がしやすいように教え方が工夫されていた	①	②	③	④
1-2. 予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される	①	②	③	④
1-3. 課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される	①	②	③	④
1-4. グループワークやディスカッションの機会がある	①	②	③	④
1-5. 質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある	①	②	③	④
1-6. ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある	①	②	③	④

問2 大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか。経験していない場合は⑤を選択してください。

項目	有用だった	ある程度有用だった	あまり有用ではなかった	有用ではなかった	経験していない
2-1. インターンシップ（5日間以上）	①	②	③	④	⑤
2-2. 海外留学・海外研修（短期も含む）	①	②	③	④	⑤
2-3. 主に英語で行われる授業の履修（語学科目を除く）	①	②	③	④	⑤

問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力などが身に付いたと思いますか。

項目	身に付いた	ある程度身に付いた	あまり身に付いていない	身に付いていない
3-1. 専門分野に関する知識・理解	①	②	③	④
3-2. 将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観	①	②	③	④
3-3. 文献・資料を収集・分析する力	①	②	③	④
3-4. 論理的に文章を書く力	①	②	③	④
3-5. 人に分かりやすく話す力	①	②	③	④
3-6. 外国語を使う力	①	②	③	④
3-7. 数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能	①	②	③	④
3-8. 問題を見つけて解決方法を考える力	①	②	③	④
3-9. 他者と協働する力	①	②	③	④
3-10. 幅広い知識、ものの見方	①	②	③	④
3-11. 異なる文化に関する知識・理解	①	②	③	④



スマホから
10分程度で
回答できます！

問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか。

項目	そう思う	ある程度そう思う	あまりそうは思わない	そうは思わない
4-1. 卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している	①	②	③	④
4-2. 授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている	①	②	③	④
4-3. 教職員が熱心に教育に取り組んでいる	①	②	③	④
4-4. 大学の学びによって成長を実感している	①	②	③	④

問5 今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか。

項目	0時間	1-5時間	6-10時間	11-15時間	16-20時間	21-30時間	31時間以上
5-1. 授業への出席（実験・実習、オンライン授業を含む）	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
5-2. 卒業論文・卒業研究・卒業制作（基本情報3で2年生を選択した場合は回答不要）	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
5-3. 予習・復習・課題など授業に関する学習（卒業論文等は除く）	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
5-4. 授業と直接関係しない自主的な学習（学問に関する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
5-5. 部活動／サークル活動	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
5-6. アルバイト／定職	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦

問6 本調査や、大学での学びについて意見がありましたら教えてください。（自由記述）

※匿名調査のため、自分自身や他人の個人情報は入力しないでください。